人は云つた。

「横濱にはまだ小豆を手に入れやうにも買つて居る店がありません」

と。それに依つてまだ横濱は混亂狀態である事を知つた。流石に帝都のお膝下は有難いものである。

一人になつた私は一時「ゆで小豆」專門で營業を續けて居た。自轉車のパンク直し屋と懇意になつて、その男を訪問する鶴殼町あたりの仲居をやつて居たといふ三十ばかりの女が、本式に飲食店をやるのなら妾が料理は出來るから使つて貰つてもよいと云つたりした。

ある雨の日であつた。それはモウ二十五日頃であつたかも知れない。前夜からの雨でおつさんの宅に滯在して居たが、横濱から來て居た夫婦は雨の中を田舍に歸ると云つて去つた。女は本當に得心して居なかつた。

「家の人があんなに云ひ出したら聞きませんから一緒に行きますが、貴郎もどうぞ商賣で儲けなさるように」

との言葉を餞として泣く〳〵去つて行つた。おつさんはブツ〳〵怒つて行つた。

「家に來る奴は皆逃げて行つてしまう」

と、今度は私の番かも知れないのだが、何とはなしにさう思はれた。

× × × × × ×

一人になつてからの生活費の安いのにも驚いた。米は三合か精々で四合位しか要らない。それに副食物はと云へば、此のガード下では何にも費用は出來なかつた。本當の簡易粗食を餘儀なくされのたである。或る時は味噌

はかりで又ある時は漬物はかりで送る日もあつた。

それに依つて今まで知らなかつたドン底生活者の樣式を讀り得る事が出來た。あんな療給でどうして家賃を拂つて一家のものが食つて行けるかとの疑問も、自分の今度の體驗に依つて氷解された。

これでは當民階級に營養不良から來る死亡者の率の多いのも無理のない事であると思つた。

私の「ゆで小豆屋」經營中隨一の客は或朝飛込んだ三人連れの若い客であつた。食ふ〳〵食ふ〳〵三人が一樣にお代りを連續して五杯宛食つて行つた事である。今でも珍しい客だと思ふて居る。

× × × × × ×

「金は百圓H氏の名義で大阪中央郵便局留置で送金してあります。それで小石川郵便局留置で出されてあるH氏の手紙を見た上、大阪でその金を受取つて赴任して下さい」

鐵南浦のA氏からの手紙である。私の東京を去る日が遂に來た。小石川郵便局に行つて見たがH氏からの手紙は來て居なかつた。如何なる條件の文意であるかそれを見なければ輕率には出發はされないと思ふたが、その日が丁度、罹災者への鐵道の無賃乘車も今日限りといふ九月三十日であつたので、是非なく大阪まで行つて見る事にし、留守居してゐたおつさんの細君に

「若し一週間以内に歸らない樣でしたら、あの水道橋の店を疊んで下さい」

との一言を殘して、竹早町から電車に乘つた。水道橋を通る時車中から自分の店に別れを惜み、神田區役所の

焼跡の天幕張の事務所で罹災者の證明書を貰つたが縦三寸横四寸位の粗末なものであつた。その頃はモウ電車は神保町から錦町を經て本石町まで通じて居た。東京驛前は流石に一入の賑ひでお祭のやうであつた。

切符賣場に罹災者の證明書を差出して朝鮮の鎭南浦までと請求した處、掛員は

「此處からは釜山までしか出しませぬ、釜山から先は朝鮮鐵道の方で又便宜を計る事になつて居ますから」

と云つて釜山までの分を與へられた。神田區役所の罹災者證明書と同じ太さの謄寫版刷りの粗末な半紙の紙片に過ぎなかつたが、それでも有難いと思はない譯には行かなかつた。これで此の紙一枚で釜山までは無賃で乘れるのであるから。

乘つた列車は狹い一部屋宛に區劃された舊式のもので、始めて見る私には珍しかつた。

四時か五時頃に横濱驛に着いたが構内は地震のために極度の高低を生じ、軌道は飴の樣に亂雜に曲つて居て、此處の被害の如何に激しかつたかゞ想像された。

此地の印象を一口に云へば、東京の方が綺麗サッパリと火葬に附された殘骸とも云はれるものであれば、全滅した横濱市街の殘骸は、生々しい血みどろの屍骸を見る樣な不快な感じを與へるものであつた。

終點の櫻木町驛で降りて、地震で落ちたり、凹凸を生じて歩行の自由を妨げるものに應急の修理を施した長い棧橋を歩いて行くと、そこに臨時に廻航された關釜連絡船の景福丸か横づけにされて居た。前年此船で朝鮮から渡つて來た私には感慨無量であつた。

罹災者は此船で清水港まで行つて又汽車に乘換へるのである。

暮行く焦土の横濱を後に、港外に碇泊して居る陸奥、長門を始め日本の全艦隊を右に見ながら、私は越し方に名殘りを惜んだ。

船中でもあの日(一日)の話で賑つた。

一人の四十はかりの女は云つた。

「妾は深川に居ました。火に追はれて永代橋を渡りましたが何方向いても火の手が上つてゐますのでどうしようかと迷ふて居る中に日が暮ました。氣を靜めて見ると何だか日比谷の方が暗いようでしたから、其の方に逃げて助かりました」と語つた。

震災が齎した犯罪について話がはづんで行つた。三十四五の男は云つた。

「貴金屬を澤山盗むなんて馬鹿な奴だ、私だつたら金を盗みます何萬圓と盗んで來てチビ〳〵費へば知れる氣遣ひはないだから私は屹度金を盗む」

それが正しい事でもあるかの樣に昂然として語るその男の目の色は變つて居た。今度また地震があつたら今にも盗んで來さうな態度で、自分が今語つて居る事が罪惡でも何でもないかの樣に語つて居る、精神に異狀を來して居るのであらうか、否々此人達はまだあの地震の興奮から覺めて居ないのである。

翌朝早く清水港に着いたが雨であつた。好天氣であつたなら富士を背景とした絶佳の勝地であらうが、雨には風情のない港であつた。

埠頭には救護班が屯して居た。此處から靜岡まで電車に乘つたが、流石に茶の產地だけに途中茶畑が多く散見された。

靜岡驛前の救護班では罹災者に弁當を配給して居た。それから私の浴衣姿を眺めた係の婦人は無理矢理に組末なネルの着物に着換させた。餘り望ましい事ではなかつたが好意を無にする譯には行かなかつた。

降りみ降らずみの鐵路を京都まで來た時に日が暮れた。此處で下車しやうと思つたが許されなかつた大阪に着いて病氣の故を以て下車しやうとしたが、絶對に下車は許されないとの事に已むなく前途案繼して大阪時事にN氏を訪れたが氏は高野線の北野田に居住して居るとの事で不知案内な始めての町に目的の人を訪ねて行つて一夜を明した。

十月二日

翌朝又大阪に引返し中央郵便局に行つて見ると局留電で百圓の爲替は到着して居た。平壤のK氏に打電するために郵便書簡口に立つたが押すな押すなの人たかりであつた。此人の群を眺めながら二十二三の係員は悠長に構へて何やら調べて居た。

貰るものを貰つてから調べてもよさそうなものにと思つて居る時側に居た二十一二の男は堪り兼てか叫んだ。

「オイ無ねのかオイ」

江戸っ兒特有の甲高い聲であつた。

「無ねかどは何や失敬な此處中央郵便局やで」

その係員は大阪辯でやり返した。

「だつて餘んまり遲いじやネーか」

係員の棒幕にダヂ〳〵となつて其男は口を噤んだ。

悠長で遲太い底力のある大阪人と、荒々しくて氣早いが腹のない江戸っ兒との傳統的に氷炭相容れない此氣質から來る葛藤をマザ〳〵と見せつけられた時、始めて眞の江戸っ兒を諒解し得たやうな氣がした。それと共に大阪人の氣風の一端もこれに依つて窺ふ事が出來るやうであつた。

所用を終へた私は渡邊橋を北へ渡つて行つた。

大阪の町は落ち着いてゐた、餘りに落ち着いて見ねた。

震災でまだ本當に興奮の覺めない私の眼には。

× × × × × × ×

その後私は大阪で病んだ。

十月も最う末であつた、秋晴れのある一日を私は神戸に遊んだ。自然の惠みの深い町、清淨な町、西には景勝の地須磨を擁し、北には又名高い摩耶さ瀧とを有ち、南に臨む紺碧の海、神戸の市街そのものが既に景勝の地である上に、此港が世界屈指の貿易港なのである。神戸に住む人々は幸福である。何事にも感傷的となつた私は布引の瀧から埠頭の方へ下りて行つた時、今入港してくる船があつた。「しやんはいまる」と記されてゐる、上海邊りから歸つて來たのだらうかと思ひながら埠頭に横着けされる巨體を眺めてゐたが、搭乘者の顏の何れもに元氣がなかつた。外國歸りの愉快な喜ばしい氣分が漂ふてはゐなかつた。上陸した人達の風體を見て始めて東京からの罹災者である事を知つた。罹災者の遣る瀬ない淋しい心理は罹災者のみがよく之を知る。私は何時までも何時までも其處に立盡した儘で力なげに散つて行く人達の淋しい後姿を見送つた。

何時とはなしに眼には涙が浮んでゐた。

（をはり）

跋後　時日の推定材料たる氣象記錄が捨て難き貴重なものであつたが爲に便則ではあるが本文中に挾んだ。書中に描き出された人物の總ては敢て本名の儘でない事を斷つておく。尾後の通信事務も相變らずの混沌たるものであつた。小石川郵便局留置できてゐる鎭南浦の日氏からの手紙と滿洲の母からの書留郵便との遞送方を請求したが、同局からの回答は來てゐないとの事に再び嚴重な抗議的請求の結果、母の爲替を手にしたのが十二月の始め頃で、それも拂渡局が振出局の手落のため同じ滿洲の地内となつてゐたりして非常な日數を要し急援の目的を全然殺がれたり、日氏の手紙は結局同局の不注意から差出人に返還されてゐたり、又焼失した郵便貯金通帳と證券預入通帳の再交付方を同年十一月の末大阪中央郵便局の手を經て屆出でたものが貯金通帳は翌年の八月當住所の東京の轉居をうろついて配達不能で原發局の朝鮮總督府遞信局貯金課の方へ逆送されてゐたり、證券預入通帳が大正十四年八月に大阪の舊住所に配達されて行衛不明になつたり、隨分な混亂振であつた上新規の證券預入の取扱ひは依然として今日まで復舊されてゐない有樣である。

それからあの時の民衆は何故不逞鮮人を恐れ又憎んだか又官憲は何故大杉榮の力を重要視したかについて疑惑を懷いて居たのであるが大正十四年の秋頃發表された朴烈事件に依つて始めて此の謎は氷解された。大逆を企てた朴烈は鮮人であり共產主義者であつた禍亂の渦の趨むく處又何をか云はんやである多衆の不安と災を買つた人一人の言動を思へば一般は心すべきである。

吾國民は共存共榮の聖旨を奉體して今少し朝鮮の本體を知れ、鮮人より一歩文化の進歩せる內地人は鮮人に對し

て父兄の位置にあり指導者の地位にある。内鮮兩民族百年の計のために慈愛の目を以て親善に努力すべしである鮮人は又内地人の風俗と習慣とに馴れよ。相互の隔意なき諒解は親善の第一歩である。平素の融和は非常時の禍亂の防禦線ともなり、不安の一掃ともなるものである。朝鮮の兄弟よ第二の朴烈たらざる事に心掛けよ、内地在住數萬の同胞の利益幸福のために。内地人は又非常時に際して冷靜なる判斷者たれ、その由緒なき妄動に依つて國家百年の大計に蹉跌を來さしむる事勿れ。之本書を通じて國民への私の切實なる希願なのである。

附錄　關東震災記

大正十二年九月一日午前十一時五十八分突如として關東地方に起れる大震は、最大振幅四寸、其地域東京、神奈川、千葉、埼玉、山梨、茨城、靜岡の一府六縣に亘り、次で起れる火災と海嘯とは、更に慘害を擴大して家屋人命の損傷算なく、實に世界史上空前の大慘禍を見るに到つた。

震源地　震源地は東西兩大學及び東京中央氣象臺の發表に依れば東京の南方二十六里、卽ち伊豆大島附近であつて、起因は相模洋西南部の地殼が陷沒せる反動として房總半島及び相南地方を中心とせる一帶の土地が隆起せる故である、是れが爲め震源地附近の海底は、多きは百尋砂きは二三十尋の沈下を示し反對に房總半島の南端附近から大磯附近に至る一帶は、最高八九尺の隆起を來し、地層の變化は遠く銚子附近に迄及んでゐる。起震と同時に湘南及び豆相地方の一部は海嘯を起したが、最も高きは片瀬の三十五六尺他は二十尺内外である。

震域は直徑三十二三里位の楕圓形をなし、東京、神奈川、千葉、埼玉、靜岡の一部最も强烈を極め、弱震區域に至つては、殆んど本州、四國全土に亘り、仁川に於ても微感あり、九州以南と北海道以北とが無感覺なるのみであつた。

餘震回數（九月一、三一六回　十月六六回　十一月四九回）

被害一般　臨時震災救護局の調査に依る被害全數は左の如くである。

府縣	全潰	半潰	全燒	半燒
東京府	一六、四一八	二三、二四六	三一〇、三七一	七五八
神奈川縣	六六、八五三	六一、五二一	六五、〇二九	一九
			一九七	

千葉縣	一四、三八五	七、五二五	一九八	四四九	—
埼玉縣	四、八三三	三、八八〇	—	—	—
靜岡縣	二、二九七	一〇、二一九	五	—	—
山梨縣	五八八	二、二五〇	—	—	—
茨城縣	一三〇	三三一	—	—	—
計	一〇五、五〇四	一〇八、九七二	三七五、八五五	七七七	

府縣	死者	傷者	行方不明
東京府	六八、一八四	四四、〇三〇	三四、八七三
神奈川縣	二九、四一二	五四、二三二	三、八二八
千葉縣	一、三四五	二、七八四	一三
埼玉縣	二二八	五一二	—
靜岡縣	三七五	一、二四三	六八
山梨縣	二〇	一一六	—
茨城縣	一〇	五四	—
計	九九、五七四	一〇二、九六一	三八、七八二

帝都及び各地の慘狀

東京 震後間もなく七十六箇所(其後檢事局の調査では百三十四ケ所)(內六箇所放火)から火を發したが、水道破壞の爲め消防の道なく、折柄の烈風に火焰は忽ち全市に漲つた、市民は咄嗟の間の兇變に喫驚狼狽し、僅かに身を以つて逃れたが、氣流の變化は各地に旋風を伴へる爲め安全地も飛火に忽ち火の海となり、老幼離散、骨肉相數ふの遑もなく、遂に本所區被服廠跡では火焰に包まれ慘死せる者三萬四千名を出し、此外吉原公園、淺草田町其他に於ても死傷算なき有樣である、火は烈々火龍勢を以て八方に延燒し、數十萬戸を燒壞して二日午後六時一先づ鎭火したが、同日正午頃上野廣小路から再び出火して附近一帶を燒き拂ひ、三日午後驟雨を浴びて漸く鎭火、大江戸以來三百年間繁華殷盛を誇れる大東京も、震後三日間の猛火に荒涼慘憺たる廢墟と化してしまつた。

燒失區域

全燒　日本橋區、京橋區、淺草區、本所區、深川區

一部燒存　下谷區、神田區、

一部燒失　麹町區、芝區、麻布區、赤坂區、四谷區、小石川區、本郷區

罹災戸數（臨時震災救護局調査）

全潰　三、九一六　半潰　四、二三〇　全燒　三〇〇、〇五九　半燒　六八

死傷者數（臨時震災救護局調査）

死者　六七、一〇三　負傷者　四一、二八七　行衛不明　三四、二三六

橫濱 起震と同時に人家軒を並べて倒潰し、火は八方より起りて市中八分通り燒亡、道路の龜裂は深さ一丈幅五尺にも及んでゐる。激震の犧牲中最も悲慘を極めたは地方裁判所で、公判開廷中廳舍倒潰し、所長以下三十餘名の判官二十餘名の辯護士二百餘名の傍聽者は咄嗟の間に慘死を遂げた、

罹災戸數（神奈川縣警察部調査）

倒潰　一八、一四九　半潰　一九、八六五　全燒　五五、八二六　（震災前戸數　九三、八四〇　殘存住宅　一七、八〇〇）

死傷者數（神奈川縣警察部調査）

死者　二三、四四〇　傷者　四二、〇五三　行衛不明　三、一八三

横須賀　各地の慘害中最も激甚を極めたのは横須賀市で、全戸數一萬千八百戸の内倒潰せざる家屋僅かに百五十、全市潰滅の慘狀を呈し、燒失戸數三千五百戸、死者五百四十名。傷者九百八十二名、行衛不明百二十五名を算した。

鎌倉　七百年來の史蹟も一朝にして半潰或は全潰し、最も由緒深き鶴が岡八幡宮は本殿の半潰を殘して樓門、拜殿總べて壞潰し、長谷の大佛は一尺ばかり進み出た、地震、火事の外海嘯の被害あり總戸數四千三百十戸の内、倒潰三千九百五十四戸、燒失七百三十三戸、死者三百七十五名、傷者千七百三十七名。

小田原　震火海嘯の三難に遭ひて全町亡滅、酒匂川大鰻橋は崩落し、附近の根府川部落は一村百五十戸津浪の爲め海中に流出した、町内總戸數五千百十一戸全部倒潰、燒失戸數は三千四百戸、死者三百五十六、傷者五百に達した。

此外湘南地方一帶は前記に讓らざる慘害を蒙り、箱根及び伊豆七島は傳ふるより被害は輕微であつた。

房總地方　今次の震災で房總地方の町村は其半は全潰滅するの慘狀を呈した那古町は總戸數九百戸中觀音堂外數戸の家を殘して全部倒潰、通行中の車馬にして逃ぐるに遑なく慘死した者さへある、死者全數百二十五傷者三百(館山町)は道路七花八裂埋立て田地の底よりは土砂を吹き出して附近一帶五尺前後陷沒し、反對に海底は隆起して遠淺となるの激甚さである。戸數千七百戸の内九割九分倒潰死者百十六、傷者百五十(北條町)避暑地として有名の北條町も最初の一震で全町亡滅し、土地の崩壞陷落甚しく、測候所は龜裂中へ陷沒した。戸數千六十戸の内全潰千五百二戸死者二百三十、傷者千四十二名。

非常施設　地震の突發するや、政府は慘禍の容易ならざるを豫知し、二日非常緊急令を公布し、續いて臨時救護局を設けて豫備金九百五十萬圓の支出決定せる外、東京内外に戒嚴令を布いたが、時恰かも政變期であつたので、同夜猛火中に親任式を擧げた山本内閣は前閣員非常施設の後を受けて、食糧の輸送、治安維持、諸機關の復舊等極力措置に努め、或は擧國救濟の告諭を發し、或は流言取締、戒嚴地の擴張、罹災者租稅の減免、第二回救恤費の支出、復興院の設置、米價販賣價格の公定など全く不眠不休の有樣であつた。一方陸海軍は電命一下救護に警備に、或は交通、通信諸機關復活に大活動を續けたが、是れに要せる陸軍側の兵力は近衛第一の兩師團全部、第十三、第二、第四、第八、第十四、第十五、各師團の一部、此外電信隊、鐵道隊、航空隊等總員四萬に及び、海軍側は長門、扶桑、日向の戰艦を始め東京灣を中心として集中せる艦艇五十餘隻に達した。

振恤救護　關東震火の報一たび天聽に達するや、聖上には深く御軫念あらせられ、三日御内帑金一千萬圓御下賜の旨仰せ出され、續いて近縣御料林より數十萬本の木材を御下賜あり、更に十六日には罹災地社會事業團體に應急費金として三萬圓を賜はり、且つ此日御成婚御延期の旨御發表あらせられたるは畏き極みである。非常救護用として五日迄に各府縣より罹災地へ輸送されたる白米は七十萬石に及び、此外大阪貯藏の政府米五十萬石も十日には輸送を了つた、其他府市、富豪の救濟は固より、各縣救護班の活躍、日本赤十字社の總動員など擧國救護に盡せる外諸外國よりも、深厚なる同情の下に多大なる金品の義捐ありたるは感銘深い事である。臨時震災救護局に於て取扱へる義捐金は内地三千百餘萬圓、外國千百餘萬圓、義捐品は見積價格内地千四百萬圓、外國千六百萬圓。

復興計畫　東洋の偉觀たる大帝都も一朝の震火に焦土と化せる爲め一時遷都說を流布されたが、九月十二日帝都復興の大詔渙發するに及んで、歸趨に惑へる住民は茲に始めて新曙光に輝いた、十六日内閣は一大警告を發して罹災者將來の覺悟を促し、十九日復興審議會を設置して明野の名士二十名を任命したが、更に二十七日是れが實行勞調として復興院を設置した、復興豫算は最初復興院に於て七億三百萬圓を決定せるも、復興審議會及

び第四十七議會に於て滿々他此額減せられ、四億五百萬圓の追加を見、是れに政府所有の建築物、物件等の復興費、地方公共團體の復興費補助及等震災關係の諸費七億五百餘萬圓を合算する時は、其の總額十二億九千餘萬圓で內容概略は左の如くである。

復興局		千圓
帝都復興費		一六、一〇八
既定額		五七三、四三八
追加額		四六八、四三八
震災復舊費		一〇五、〇〇〇
		七〇五、九二六
所管別		千圓
內務省	一五〇、四〇六	陸軍省 一三五、八六三
大藏省	四〇、六一九	海軍省 七八、〇〇〇
		司法省 九、〇八一
總計		一、二九五、四四三
		文部省 一〇六、三七三
		農商務省 二七、六九四
		通信省 一五七、七三六

大正十三年二月廿五日帝都復興審議會及び帝都復興院は廢止せられ是れに更ふるに復興局を設置する。

昭和二年八月廿七日印刷
昭和二年九月一日發行

回顧の大震災私記
苦き生の惠み
奥付
【定價壹圓】

著者 武末壽王哲 大阪市西淀川區浦江町六十番地
發行者 武末安治 大阪市西淀川區浦江町六十番地
印刷者 武末安治 大阪市西淀川區浦江町六十番地
印刷所 大阪酒醬油新聞社 大阪市西淀川區浦江町六十番地
發行所 就實社

不許復製

313
1001